新幹事になって

民謡紀行

柳原　藤忠
（昭和39年工業化学科卒）

東京秋工会の役員として、平成29年9月からお世話になっています。幹事会では秋田の人と民謡を謡い、秋田の料理で秋田の酒を飲む。本当に楽しい一時です。ここに民謡紀行を紹介します。

◇風雪流れ旅

北島三郎の唄う「風雪流れ旅」（星野哲郎作詞・船村徹作曲）は当時の津軽三味線奏者の大変さ、惨めさ・凄まじさが良く表現されている。民謡の師匠「成田雲竹」と兄弟子「高谷左雲竹」と弟弟子「高橋竹山」のまさに生きんがための乞食のような演奏旅行を唄ったものである

○ 破れ一重に　三味線抱けば
　　よしゃれ　よしゃれと雪が降る
　泣きの十六　短い指に
　　息を吹きかけ超えてきた
　アイヤ　アイヤ　津軽八戸大湊

演奏旅行は、北海道・奥羽・北陸を中心に、時には朝鮮半島まで渡った。金は無いし食うものも無い。足で歩き、民家の前で三味線を弾き、歌を唄い、いくばくかのお金や食べ物を恵んで貰うのだが、何も貰えない時の方が多いのである。

師匠「成田雲竹」は高齢であり、弟弟子「高橋竹山」は盲目である。兄弟子で障害を持たない「高谷左雲竹」は本当に苦労をした。その生活道具は兄弟子「左雲竹」が背負わなければならない。時には師匠を背負い、弟弟子「竹山」の杖を牽いて山道を越えねばならない。夏は何処にでも野宿出来るが、冬がつらい。まさに「風雪流れ旅」である。水車小屋や漁師小屋、農家の納屋などで寒さと飢えをしのいだ。小生の三味線の師匠は、兄弟子「高谷左雲竹」の弟子で「和田左雲竹峰」です。三味線のけいこの合間に聞いた、このような先人の苦労話しが心に沁み入ります。

現在、私達が民謡や三味線を楽しむ事が出来るのも先人のお陰と、有難く思う次第です。

◇平家哀歌・麦屋節

約800年前、屋島・壇ノ浦の戦いで敗れた平家の落人一行は、安住の地を求めて、富山県の庄川の上流にたどり着いた。五箇山と言われる一帯である。聞こえるのは庄川のせせらぎと、鹿の鳴き声のみである。負け戦にひしがれ、なんとも寂しくせつない旅であった。

この一行を率いているのは「平文弥（たいらのもんや）」である。その時の、その一行の、その感情が現代に伝えられている「麦屋節」である。しかし、何時の頃からか平家落人と付近の里人とが麦を刈る時、一緒に謡うようになり、誰言うとはなしに「麦屋節」と呼ばれるようになった。

○ 心寂しや　落ち行く道は
　　川の鳴る瀬と　鹿の声
　　じゃんとこ―い　じゃんとこ―い

○ 川の鳴る瀬に　絹機たてて
　　波に織らせて　岩に着しょ
　　じゃんとこ―い　じゃんとこ―い

詩歌・節調共に優雅で哀調深い。踊りは黒紋付、白袴、白たすき、そして腰に尺の指物という平家踊りそのものである。

鳴り物は三味線、胡弓・尺八・太鼓等賑やかである。賑やかではあるが、一種夢幻の趣がある踊りである。

800年前の心情を今に伝える民謡、文化遺産として今後も伝えなければならない物の一つである。

平成30年金砂健児の集い・民謡伴奏(左から2人目の三味線)

株式会社
渡辺佐文建築設計事務所
代表取締役会長　渡邉　佐文（A25卒）
〒010-0954　秋田市山王沼田町6番8号　TEL 018-863-8431